次元の理を盗んだ転生者と禁忌教典

■ ■■

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

憧れたものがあった。

どうしても手に入れたかった。

だから代償を支払うことを厭わない。

――――――でも、零したものは、何よりも大事なものだった。

これは、主人公に成りたい「主人公」の物語。

目次

初めまして ―――― 1
主人公：グレン・レーダス ―――― 16
純白の手袋 ―――― 37

初めまして

僕の名前は「スコール・バックランド」。

ただの転生者だ。

別に神様転生ってわけではない。少なくとも神様に会った記憶は無い。

僕はただ、死に間際で理を盗んで運よく転生しただけの一般人だ。

僕が転生したのは割とテンプレートをなぞった異世界だ。それはもう、簡単に夢想ができるんじゃないかと思いあがってしまうぐらいには『なろう風』で、でもそうできないぐらいには『現実的』な。

記憶の整理がてら、軽くこの世界について説明させてもらおう。簡単に言えば、この世界は文明レベルが産業革命直後の、科学が『魔術』というちょっと不思議な技術に置き換わった世界だ。

呪文を唱えれば指先から火が噴き出たり、バリバリ雷が迸ったり、風が吹き荒んだりする。

でも、それらの魔術を公衆の面前で行使するには資格が必要で、資格ごと習得したいのならしかるべき教育機関で学ばないといけない。そもそも魔術を扱えるようになる

大前提の『魔力』を持つ者が少ないせいで、その魔術師たちもちょっとばかり選民思想が入ってるって感じだ。

ちなみに、この国で魔術を学びたいなら基本的に「アルザーノ帝国魔術学院」とやらに入学する必要がある。この学院が大体どのぐらいのレベルなのかは、下調べを怠った僕では分からない。主観でいいならそこそこ良い方だとは思うのだけれど、そもそもの比較対象が少なすぎて正確な判断はできない。

うーん。国の名を関している以上、きっと名門なのだろうが……。まぁ、ともあれ、勉強は頑張らねば。環境が良かろうと、身が入らなければ意味がないのだから。

前世の知識も、というか勉強も、数学以外は役に立たなそうだし……。

なんで科学が発展してないんだよ。唯一の得意科目が……。

え？　国語はどうなんだって？　……ここ、異世界。日本語、無い。

オーケー？

まぁ、だからこうして暗号代わりに使えるんだけれどね。

そして年月は過ぎ、僕は無事に「アルザーノ帝国魔術学院」に入学した。

した、は良いもののつい最近学院の有名講師が辞めてしまい、残った授業が非常勤の方に委ねられることとなったのだ。それだけでも、真面目に勉強している学生にはつら

いのに、僕は彼の特殊な事情を知ってしまっている。
だから、明らか様に不審な失踪がなんかの波乱の前兆に思えて仕方がない。
はぁ、これはもう絶対になんか事件が起こる前触れだよなぁ……。『この時、僕らはまだあんな凄惨な事件が起ころうとは予想だにしていなかった』って感じのト書きがどこかに書かれるような、ごってごての前兆。
不安しかないよ。

朝もやの残る並木道を歩いていく。
未だ朝早く、通りに人影はさほど見えないが、所々で働きだしている姿を見るともう少しすると、ここも活発になり人通りが増えるだろう。
コンクリートの類は見当たらず、石と木で構成された街道に、家々。
差し込む朝日がそれらを照らし、道には薄い影を引いている。
その道の脇で一人の少女が、座り込んだ老人を隠すように蹲っていた。
少女の後ろ姿しか見えないが、その蜂蜜のような金髪はそれだけでも羨ましがれるだろう髪質だ。ウサギの様なリボンが特徴的だ。
着ている制服から、僕の学園と同じ生徒だと察し、記憶の中を漁って人物に辺りを付ける。

それと同時に、彼女の行動に少しばかりの好奇心を覚えた。
道脇に近づくように進路を修正して、その少女が何をしているのかも理解した。
隠れていて見えないが、どうやらその老人は指を怪我したらしい。それを見つけた少女――ルミア＝テインジェルが「魔術」を使って治しているのだろう。
本来学外で許可なく魔術を使うのは違法なのだが……まぁ、別に犯罪を起こそうとしているわけでもなし、見逃してもいい程度の事だ。でも人にバレたらバツが悪いだろう。
少しの好奇心を満たした僕は、その少女に存在を気取られないように足を止めることなくその場を通り過ぎていく。足音を殺し、気付かれないするのを忘れずに。
彼女はシスティーナ＝フィーベルという娘と同居している。その為にほぼ毎日一緒に登校しているが……周囲に姿が無いということは、恐らく寝坊しているのだろう。その内彼女と合流するに違いない。
案の定、少し遅れて彼女が合流するのを見ずに知る。
先程、視線の届かない老人の怪我を知ったのと同じ方法だ。
魔法《ディメンション》。
それが、僕が常時発動している魔法の名前。
転生者である僕が独自に編み出した、『呪術』と呼ばれる技術。

元ネタは転生前にドはまりした小説の設定からだが、この世界でその小説は無いので大手を振って僕が開発したと言える。言わないけど。

今僕が学んでいる「魔術」とは根本的に違うので、一応別体系の技術としているが、専門家に見せたことは無いのでどうかは分からない。

この魔法のお陰で、僕は半径十メートル以内の情報を常に知覚できる。

普段は取得情報を落して微々たる量の魔力のみで発動させているが、その気になれば今の規模とは比べ物にならないほど広く、かつ濃く展開できたりする。

さっきも彼女のいる方の道脇に進路を修正したが、実際彼女との距離は９メートル位。足音も殺していることだし、早々バレる事は無い。

今は《ディメンション》に魔力を接ぎこんで、後ろのルミアとシスティーナの視線から逃れるように歩いている。

道の看板や、ランタンの街頭。この魔法なら眼球運動の仕方から相手の意識の向いている方向も割り出せるので、意識の外に出るように歩いている。

何故僕があの二人を避けるようにしているのか。まぁ、それほど大したことじゃない。ルミアが幼馴染に似ていて、少し苦手なのだ。

『惚れた方が負け』という通り、僕は彼女にべた惚れで、彼女には頭が上がらない。告白して、それにＯＫまで貰ったのだから更に。

彼女以外に浮気しないように、というかルミアを見ていると彼女に見られているみたいで落ち着かなくなる。

彼女は僕の故郷で僕の帰りを待っているので、故郷に帰るその日までしっかりしていなければならないしね。

そういうことで、この事情を知らないルミアには悪いが、彼女には一切の非が無いことだけ伝えておく。

避け気味な僕の対応で彼女がしょんぼりしていると、まるで幼馴染の方がしょんぼりしているみたいでどうにも敵わない。

そういうわけで、彼女は学園における僕の天敵といえるだろう。

そんなことを考えながら十字路を通り抜ける。もう充分離れたし、そろそろ《ディメンション》を元に戻そう。

ところで、先程までの魔法は魔力を節約するために極々小域にしか展開していなかった。具体的には、『僕からの半径』ではなく、『対象の周囲』に重きを置いていたのだ。

当然その分だけ他のところに割いていた注意は減っていて、だからこそ今更気づいたのかもしれない。

十字路を渡り切って、ふと横を見ると遠くに男の姿がある。走っているようでだんだん大きくなるが、このままでは後ろの彼女たちとぶつかるかもしれない。

少し思案して、まあいいやと割り切る。
男も「街角でごっつんこ！」とかやらかすほど馬鹿じゃないだろう。というかむしろやらかすなら見て見たい。
すっかり手慣れた《ディメンション》の操作で、十字路の所に意識を残したまま僕は進む。
この慣れ具合で、僕がどれ程野次馬してきたかお察し頂けると思う。学園内のスキャンダルネタは、大抵抑えている。
あ、案の定ぶつか――
「お、《大いなる風よ》――ッ！」
――らず、システィーナの一節詠唱で唱えた黒魔【ゲイル・ブロウ】が炸裂して男は吹き飛ばされた。
……これは予想外だった。「危機下での判断にこそ、その者の本質は宿る」というが、これが彼女の本性なのだろうか？
級友の思わぬ獰猛性に冷や汗を流しつつ、男の行方を追う。いやまあ、傍に小動物（ミルア）みたいな子がいるから、強く警戒しているだけだろうけど。確かに彼女の無防備さは見ていて危ないものがあるので、その気持ちは分からなくも無い。
男は放物線を描いて……おい僕の背より高く打ち上げられてるんだけど大丈夫なの

これっ!?
慌てて着地予想地点を見ると、そこは斜め前の噴水だった。
まあ、水なら何とかなるんじゃないかな。知らないけど。
ハラハラしつつ見守る。
「うわっ！」
男はバッシャーン！　と大きな音を立てて落ち、盛大に水しぶきを上げた。その音が思いの外大きく、びっくりしてしまったのだ。
声を上げたことで、二人とも噴水の傍に僕がいるのに気づいたみたいだ。これはもう、逃げられそうにない。
幸い、男に怪我は無いようだった。受け身でも取ったのだろうか？でも地上と水中じゃあ、勝手が違うと思うのだが……
好奇心が疼くが一旦抑えて、男に声をかける。
「大丈夫ですか？」
男は僕を一瞥して、こう言った。
「ちっ、男か」
僕は彼を再び噴水の中に蹴落とした。
「おわぁっ！」

「さて」

何事も無かったかのように、すたすた歩き去る。心無しどころか、おもいっきし早く。

空を仰いで見える、変わらずそこに浮かぶ半透明の天空城、「メルガリウスの天空城」。

前世の世界の常識で考えれば、存在自体があり得ない物がごろごろしているこの世界で、今日も僕は生きる。

「今日も良い天気だ」

そう言って、僕は歩を進める。

「『良い天気』じゃねぇよっ！　全く!!　どんな教育受けてんだ!?　あ!?」

そう、スコール君の後ろ姿に向けて吠える黒髪の男の人。親の顔が見て見たいわっ！

と愚痴を言いながら、私たちの方に向き直る。

結局、また話しかけられなかったなぁ……学校の中なら話しかけに行けたんだけれど……

そして、謝ろうとするシスティを差し置いて口を開いた。

「あの……ごめんなさ――」

「そしてお前もだ！　街中での魔術行使は違反だぞ!?　というかそれ以前に下手したら殺人だぞ!?」

うん、凄く怒っている。

謝罪を遮られたシスティは固まっている。

「まー完全にお前らが１００％悪いのは明白なんだが、俺は優しいから何かお礼になるようなもんでもありゃ許してやらんでも……」

ああ、駄目だ。システィだけが怒られるわけにはいかない。怒られるなら、私もだ。だって、あの行動はシスティが私の事を守ろうとしてやったのだと知っているから。

さっき男の人が出てきたとき、ぶつかりそうだったのは私の方だった。システィは私を守ろうと、とっさに動いてくれたのだ。

昔から少し乱暴に思われて男子から敬遠されるところがあるけれど、そんなシスティが凄く優しいのを、傍で見てきた私は知っている。

何より、魔術を故人であるお爺様との絆のように扱うシスティが、魔術行使で悪く言われちゃったら、きっと、凄く傷つくだろうから。

「す、すいません。私からも謝ります……」

うう、でも怖いよぉ……

男の人の視線が私に向く。まるでつい今しがた気付いたみたいな……いや、実際そう

なんだろう。私、そんなに存在感ないかなぁ？
「……？」
「……？」
男の人が、何かを探るように私を見つめてくる。まるで、記憶の中から何かを掘り起こすように、難しい顔をしている。
むにっ。
「っ!?」
いきなり頬を摘まれた。
それから体中をジロジロ見られたり、肩やら腰やらをペタペタ触られる。
へ、へぇっ……!?
「お礼」って、そういう事っ!?
いや、でもいやらしさは無いような……どちらかというと、何かを確認しているような……。
そこでようやく再起動したシスティが、男の人を蹴り飛ばす。
「アンタ、何をやっとるかぁぁぁぁぁぁ!!!」
「ぎゃぁぁぁぁ!!」
その上段廻し蹴りは見事その男の人の延髄を捉えて、凄く痛そうだった。

男の人は情けなく地面を転がっていき、みずぼらしくなっていく。
おそらく卸したてだったのだろう見事な衣服はボロボロで、濡れ果てた上に擦り切れ土塗れになり、最早その原型もない。
でも、うん、助かったよシスティ。
「不注意でぶつかってくるのは良いとして、何なのよ今のはっ!?　女子の体を不躾にジロジロ見まわした上に無遠慮に撫でまわすなんて信じられない！　最っ低!!」
「ちょっと待て、落ち着け!?　俺はただ学者の端くれとして、純然たる好奇心と探求心でだな!?　やましい気持ちは無い！　ちょびっとしか！」
「なお悪いわっ！」
「ごぼっ！」
追撃に、脇腹に鋭い拳が突き刺さる。もちろんシスティの拳だ。
激しく動いたシスティは息を乱しながら、こういった。
「はぁ、はぁ……ルミア!!　今すぐこの変態を警備官に突き出すわよ!!」
「えっ」
「ええっ!?」
一瞬過激過ぎではと思うが、まぁここで見過ごして他の人に迷惑をかけるかもしれないし……

「ち、ちょっと待って!!　許して!!　仕事初日からそんなの殺されちゃう!!」
その男の人はシスティの足元まで這いつくばり、足を掴んで警備官を呼びに行こうとする動きを止める。
突然ヘンタ……男の人に足を掴まれたことで、システィは悲鳴を上げた。
「触らないで！　しっ、知らないわよそんなの!!」
うん、この場はさっさと切り上げた方が良いかもしれない。
「まぁまぁ、私も気にしないから……」
反省はしてるみたいだし、と小さく付け足す。実は少し気にはしてるが、そんなことを言ってると更に足止めされそうだ。下手したら遅刻して、今日から来るという新任講師の人にシスティまで悪印象を抱かれるかもしれない。
「ええっ……!?　もう……本当に甘いわねルミア……」
そうは言うが、システィも矛を収めてくれるようだ。というかもうこれ以上関わりたくないのだろう。もう足が学園の方に動いている。
何はともあれ、これで安心して学園に行ける。早く行こう。
そう決意したところで、男の人が起き上がって口を開いた。
謝罪かな?そういうのはいいんだけれど……元々悪いのはこっちだったんだし……
「フゥ、所でその制服……お前ら魔術学院の生徒だな?」

「だから何なのよその変わり身は」
何だろう。なんでさっきまでの事を無かったように話し始めれるんだろう。実は割と凄いのかもしれない。見習いたくはないが。
魔術学院の生徒だと分かったのは、此処、「学究都市フェジテ」で、学院が一つしかないからだろう。
「授業は８時４０分からだろ？　急がないと遅刻だぞ？」
システィの突っ込みに構わず続ける。って遅刻？
余裕を持って出てきたから、まだ時間があるはずなんだけれど……
「は？　遅刻？」
システィも不思議に思ったのか、そう聞き返した。
男の人は自分の懐中時計を見せてこう言った。
「この時計を見ろ、もう８時半だ」
「え？」
確かに８時半になっている懐中時計を見て、慌てて自分の時計を見る。
そこに示されているのは８時。あれ？
「その時計、進んでませんか？今８時の筈ですけど……」
暫く呆然としてから、何かに気づいたようで顔を歪めている。

小声で何かを呟いたようだが、聞こえなかった。
「あー、俺急用思い出したわ。邪魔したな、お二人さん」
「「あっ!?」」
くるりと身を翻して、何処かへ歩き去っていく。急用って何なのだろうか？
「な、なんだったんだろ……」
「もうどうでもいいじゃない。私たちも行きましょ、ルミア」
そう言って空を見上げたシスティと共に学院へ向かう。
私もそれにつられて空を見る。
いつも通り空に浮かぶ幻の城に、澄み渡った晴れの空。
本格的に朝になってきて、日差しが明るくなっていくのが分かる。
「うんっ、本当に良い天気」
そう私は言って、微笑みを零した。

主人公：グレン・レーダス

「今日からヒューイ先生の代わりに新しい先生が来る。一か月の非常勤講師としてだがな」

そうアルフォネア教授は言ったが、一向にその「非常勤講師」とやらの姿は見えない。

その講師について教授は「中々優秀」と言ったが、既に授業時間の半分は過ぎている。

「講師泣かし」で有名なシスティーナも険悪な感じで隣のルミアと話している。段差で後ろの列ほど高いこの教室の中で一番後ろの方に座っている僕には、彼女を落ち着けようと頑張るルミアの姿がよく見える。

因みにこの学院の教室は、生徒の席が黒板と教卓を中心に半円を描いている。前世で見た「空想の大学」って感じだ。他はどうか知らないが、僕の通っていたところは小中高と同じような教室だった。ホワイトボードはあったが。

ガチャリと内開きのドアが開く。講師が来たことに気づいたシスティーナが早速文句を言おうとし……突然叫びだす。

「って、あーーー！」

その姿を見た講師は、ゲッともらす。

ああ、今朝システィーナに吹き飛ばられた男か。なんでこんなに遅いんだ？

「あ、貴方は今朝の……！」

「違います人違いです」

「なわけないでしょっ！」

凄くめんどくさそうな顔で、言い訳するようにそういって、彼はシスティーナから顔を背けた。

で、お名前は？

「えー……」

頭をぼりぼり掻きながら、凄くやる気のない姿勢で教壇の前に立つ。欠伸を噛み締めながら少しの間をおいて、自己紹介が始まった。

「グレン＝レーダスです。これから一か月、皆さんの勉学のお手伝いをさせて頂きます」

グレン先生、ね。ここから趣味だとかそういうのに続かない所を見ると、効率重視な人なのだろうか。こちらに背を向け、手に取ったのはチョーク。早速授業が始まるのか、と僕は身構えた。

グレン先生が黒板に書く字を凝視する。

ん？　真ん中？　行き成りど真ん中？　何を書くんだ？　どんな授ぎょ――

自習。

……。

「え？　じしゅ……え？　じしゅ……う？　え？　……え？」

信じられないという様子のシスティーナ。ざわついている教室。僕も信じられない。何だこの講師。型破りにも限度があるだろ。

それに追い打ちをかけるように、グレン先生が言う。

「えー、本日の一時限目の授業は自習にしまーす」

ふあぁ……と欠伸を一つして、付け足すようにこう呟いた。

「眠いから」

さしてグレン先生は教卓の前に座り……そのまま眠った。

振りでもなく。ガチで。《ディメンション》で確認したけど、本当に寝てる。

……。

沈黙が教室を支配する。かつて地球上でこれほど静かであった場所があるだろうか？

重く垂れ込む共通の感情。「非常勤講師が授業放棄」というありえない展開に、言葉に

し難く口にするのが躊躇われる思いを抱える。
もう、単に「音が無い」という領域を飛び越えて、音が吸収されてるのではないかというほどの空気。
窓の外に、風で梢が擦れる音や鳥の鳴き声が響く。ガラスの窓に遮られ、チョークの音にすら劣るほど小さくなったその音が教室中に聞こえ、かえってこの静寂を濃くする。
……うん。
ぐがぁぁぁー。
グレン先生の鼾が、静かな教室に届く。
何を思ったのかシスティーナが立ち上がる。
そして手元の分厚い教科書を振りかぶり、叫んだ。
「ちょおっと待てぇぇぇぇ――――――!!!!!」
そりゃそうだよな。
マジで先生を殺しかねないシスティーナと、その凶行を止めようとするルミア。
僕らは唯、それを見守っていた。
……いやだって別に先生の味方するつもりないし。

一応我に返ってルミアに加勢したりしたが、ぶっちゃけあのまま放っておいても良いんじゃないかと思う。ていうか止めなくても良いんじゃない？　主人公ならこんなところで簡単に死なないだろうし、主人公じゃないなら死んでもかまわ……構わないな。うん。

カツ、カツ、とチョークの音が響く。

「で～多分こうだから～」

学院は、前世の小学校のような形式で授業が行われている。

即ち、一人の教師が複数の教科を生徒に教えるということだ。

従って、学園で学べることはその教師の質に左右されることに他ならない。

その点においてヒューイ先生の授業はとても分かりやすく、またその人柄も人好きされるものだったために人気であった。

ではグレン先生はどうなのか？

それはヒューイ先生とは正反対と言わざるを得ない。

とてもやる気のない授業。そもそも社会人としていかがなものかという人柄。

……これが、僕らの講師？

き、きっと本気を出せば凄いんだ……

そう願う僕なんかお構いなしに、授業が進む。
「〜で、大体こうで〜」
やる気が無くても一流、という授業では勿論無く。寧ろ自習していた方が実りがあるのでは？　というほど無意味な時間。
書いている文字は汚すぎて殆ど解読できなく、喋っていることは教科書の音読。
その授業を受けている生徒の反応といえば、
「すげぇよ。おれ、あそこまで死んだ魚みてぇな目ぇした人なんて、見たことないぞ……」
「ヒューイ先生の方が良かったなぁ……」
という呟きがそこらで聞こえるということで、まぁお察しいただけると思う。
ただ、そんな授業でも真面目に受ける人というのはいるもので。
「あの、先生」
「うん？」
気弱そうな、小柄な女子が手を上げる。
彼女の名前はリン。図書委員が似合いそうな雰囲気の女子だ。
どこか幸薄そうな空気を抱えているが、とある一点だけは羨ましがられるものを持っている。

何がとは言わないが。
「何が」とはいっていないがっ！
「質問があるんですが……」
「なんだ？　言ってみな？」
あれ？　答えるのか？
いや、そうだよな。それが普通だよな。てっきり「自分で調べろ」とかいうものかと思ってたが、うん、仮にも教師だしな？　答えるよな。
うん。
違和感しかない。
「えっと、さっき先生の紹介した、此処のルーン語の訳の一例なんですが……これの共通語訳が分からなくって」
「ふっ、俺も分からん」
「えっ？」
「すまんな。自分で調べてくれ」
……。
僕は一体、何回絶句すればいいのだろうか。
まさか当たってこれほど嬉しくない予想があるなんて、今まで一度も知らなかった。

当たんない方がよかったな、こんな予想。
堂々とそう言い放ったグレン先生に、呆然としているリン。
グレンの発言にシスティーナが、立ち上がって抗議する。
「待ってください、先生。生徒の質問にその対応は、講師として如何なものかと」
もっともだ。しかしそれで態度が直るような先生でないことは、一日にも満たない授業で十分理解できている。
案の定、めんどくさそうなグレン先生は、その抗議にこう返した。
「あのなぁ？　俺にも分からんって言ってんだろ？　分からん物をどう解説するんだ？」
「それならば調べ上げて次の授業で改めて伝えるとか、工夫するのが講師というものだと思うのですが？」
「む、じゃあ自分で調べた方が早いんじゃねぇの？」
「そういうことを言いたいのではありません！　私が言いたいのは講師としての態度で――」
「あー、なに？　お前らルーン語の辞書の引き方、まだ習ってなかったの？　じゃあしょうがねぇな。俺が調べといてやるから、明日また来い。はあ、余計な仕事が増えちまった……」

「ぐっ、辞書ぐらい引けます！　もう結構です！」

随分と煽るなぁ。

ハラハラしてそのやり取りを見守っていたリンは、荒々しく帰っていったシスティーナが乱暴に着席する音に肩を跳ねさせた。

そしてようやく混乱が引いたのか、それともとりあえず人の目に晒されたくなかったのか。そのまま自席に戻っていった。

その後、リンはシスティーナに借りたルーン語の辞書を引き、分からない文法をシスティーナに聞きに行きながらその時間を過ごした。

男子間でも女子間でも好かれているリンの対するその態度を見たクラス中の空気は一気に悪化し、無駄に時間が経つにつれ苛立ちは深まっていくのが肌で分かる。

こうして、非常勤講師（グレン＝レーダス）の記念すべき初授業は、史上類を見ないほど無駄な時間となって浪費されるのであった。

次の授業は錬金術実験。薬品などを扱う危ない授業で、念のために汚れても良い服に着替える必要がある為、今は男子更衣室に居る。

「なあ、スコール。あの新任講師、最悪だったよな」

そうカッシュは僕に言う。

眉間にしわが寄り、口もいつものように緩くない所を見るに、先ほどの授業が腹に据えかねたのだろう。気持ちはわかる。

「ははは……僕としては何故講師に成れたのが知りたいところだね。講師に成れてる以上、ある程度の実力はあるはずで、だからさっきのリンの質問にも答えられたはずなんだけど……」

「だよな!?　なんであんなにだらけんのかねぇ！　やる気がないなら帰ってもらいたいよ、まったく！」

「なんでやる気が無いんだろうねぇー」

そう、そこが不自然だ。

講師になった動機が志望なら、あそこまでだらける事は無いはずだ。なら講師になったのは志望した訳では無いことになる。

強制された？　誰に？

ああ。訳の分からないことばかりだ。

「……ん？」

「あ？　どうしたんだ？」

そういえば、もう一つ違和感が。

「いやさ、次の授業、錬金術だよな？」

「ああ、そうだな。それがどうした？」
「講師も着替える筈だよな？」
「あ、ああ」
「なんで未だに先生来ないんだ？」
「……」
　嫌な予感がする。
　少なくとも周囲にグレン先生がいないのは分かる。職員用の更衣室がつい先日出来上がったなんて話は無いし、着替えるなら此処に来るはずなんだけれど……
「まさか忘れたんじゃ……」
「それはないだろう」
「あれ？ギイブル？」
　カッシュと話していると、傍で着替えていたギイブルが入ってきた。
　さっきまで自習で、更衣室に来るのが遅かったけど……その割に着替えるの早いな。
「先ほど、此処に来る前に着替えを手に持ったグレン講師の姿を見た。恐らく教員用の更衣室があるのではないか？」
「でも去年ヒューイ先生は一緒に着替えてたよなぁ？」
「それは……友好を深める為だったんじゃないか？」

「そもそも教員用の更衣室があるなんて、聞いたことないよ？」
一年以上この学園で学んで、その傍らにマッピングをしてきたが、それらしい部屋は無かった。
ギイブルとカッシュの考察を聞く傍ら、以前先輩から聞いた豆知識を思い出す。
「なあ、二人とも」
「なんだ？」
「どうした？」
二人して和気合い合いとしているところに水を差すようで心苦しいが……
「先輩に聞いた話なんだが、ちょっと前までの男子更衣室は『今の女子更衣室の場所』らしいぞ？」
「「……」」
それがどうした、という返しが来ない。
うん、気付いたか。
「グレン先生って、確か此処の卒業生じゃ……」
「……流石に施設の変化ぐらいは覚えるだろう。講師として」
「あのグレン先生だよ？」
「……」

「くっ、グレン先生は嫌いだが、今は素直に羨ましいっ……!!」
「女子更衣室、勿論システィーナさんもいるよな？」
「……」
「次の授業。大丈夫かな？」
「「……だ、大丈夫だろ」」
「だといいけど……」
　案の定、この日の錬金術実験は担当する講師が人事負傷に陥ったことにより、中止と相成った。

「あー！　くそっ、何もあそこまでやらなくていいだろ……いちち。割とマジでやりやがって、あいつら」
　いやまあ、そりゃそうだろ。
「ずいぶん痛々しいですね、先生」
　んー、すげぇ。骨に軽く罅が入ってたり色々青タンできてたりするけど、逆に言うならそれだけだ。あれほど声張ってたなら、その怒り具合も想像がつく。おそらくシル

フィーナは全力だったろう。勿論後遺症が残らない程度に加減はした筈だが、それでももう少し重症になると思ってた。成程、痛みの中でもブレないこの体幹といい、先生は肉体派なのかな？　実力はある方だろう。

軽く覗きはしたが、見ているだけで痛くなってきたので途中で切り上げた先程の乱闘騒ぎを思い返して、そう思う。そういや、本当にヤバい奴は一個も当たってなかったな。

「おー、えーっと、バックランド……だっけか？　たっく、ひでぇぜあいつ。か弱い男にこんなことするかねぇ？　親の顔を見て見たいよ、全く」

「授業参観の日になれば見れますよ」

「そん時俺もうやめてっから」

「さぁ、どうでしょうねぇ」

「おう、どういう意味だ？」

「ふふふ……」

「おい、その意味深長な笑いをやめろ」

あからさまにやる気がない人だけど、見た限り実力は確かだ。本人がとこか特殊な組織に属している様子もないし、恐らくは誰かに個々の職をあっせんされただけなんだろうけど……だったら猶更辞めるのは難しい。

たぶんこの先生の事だし、学校に出した被害の賠償やら見直された実力やらが原因で

正式に雇われるんじゃなかろうか。教員としてか警備としてかは分からないが。
「まあ、先生が何故そこまで手を抜いてるのかは分かりませんが、このままだと凄いことになりますよ？」
「ああ？　辞職させられるなら、むしろこっちからお願いしたいが――」
「いえ、そうじゃなく」
成程、やめるにやめられない、と。自分の意思で講師になったわけじゃなく、それをやめようとすることを阻められている。
んー、うちの学校の上層部の関係者で、尚且つこの人を御せそうなのは……本命でセリカ先生、次にリック学園長。大穴でヒューイ先生かな？　他の先生じゃ、まず付き合う事すらできなさそうだ。ストレスで胃が死にそう。
セシリア先生なんてのもあり得そうだが……年中吐血する法医師と、その面倒を見るツンデレ主人公。あると思います！
「なんか今、ちょっと嬉しい偏見持たれた気がするんだが」
「嬉しいならいいんじゃないですか？　偏見じゃないし」
「そうかぁ……？」
うーん、鋭い。
「システィーナさんは『教師泣かせ』と呼ばれているのはご存じですか？」

「システィーナ？　……ああ、白猫か！」
「猫？　まあ、あれは銀髪なんですけどね。もう少し洒落たあだ名にしてあげたらどうです？　僕も思いつきませんが」
「自分にできないことを他人に任せんなよ」
「先生が『白猫』とか言ったお陰で、それに固定されちゃったんですよ。まあ、それはともかく、ちゃんとしないと彼女がキレますよ。恐らく今日以上に」
「あー、大丈夫だって。」
「だといいんですがね」
　僕はそこで雑談を切り上げ、家路に帰ることにした。
「それじゃあ先生、さようなら」
「おう、さよなら」

「魔力容量１８６５ＭＰ、魔力濃度１２１ＡＭＰ、か。随分と低いな」
　人気の少ない道を歩きながら、僕は先程魔法で測ったグレン先生の魔力容量と濃度を思い返す。

そう、僕は何も雑談するためにグレン先生と接触したのではない、《ディメンション》の応用で、グレン先生の基礎スペックを計測するために近づいていたのだ。

『注視』でもできなくないが、あれは割と大雑把なので近づかないと細かい数値が分からないのだ。まだまだ改造しないとなぁ。

大体『注視』の性質上、それで測れるのは『質量の無い細胞』、僕の『呪術《レベルアップ》』で手に入れた数値がメインなのだ。当然、この世界にそんなものが知れ渡ってるわけもなし。大まかなスペックしか測れない仕様なのだ。今のところ改善の目途は立っているが、まだ暫くは今のままだろう。

因みに、『注視』で見たグレン先生のステータスはこうだ。

【ステータス】
名前：グレン・レーダス　ＨＰ５１／５１　ＭＰ５９／５９　クラス：脱落者
レベル１
筋力１．８６　体力１．７５　技量１．８５　速さ１．７１　賢さ２．０５　魔力１．４０　素質３．５０
状態：平常
マナ・バイオリズム：ニュートラル

経験値：７３７０１／１００
【魔術性質】
魔術特性（パーソナリティ）：変化の停滞・停止
魔力容量１８６５ＭＰ
魔力濃度１２１ＡＭＰ
【スキル】
先天スキル：悪感２．７５　信条２．１２
後天スキル：演算思考２．５７　戦術分析２．１１　最適行動１．６０　体術２．１５　魔術１．８０　拳銃２．８５　魔術知識２．８５
装備：アルザーノ帝国魔術学院教員用制服
　　愚者のアルカナ
　　虚量石（ホローツ）
　　通信石

とまあ、中々面白いことになっている。
まず全体的にスキルが高い。２．００以上何て化け物の領域だ。そんなものが平然

と並ぶステータスは久しぶりに見た。
それに魔術のスキルが高いわりに、魔力は低い。魔術特性が影響しているのかな？
にしてはスキルが高すぎる。やはり謎が多い。
まあ、素質が高いのは予想通りだったな。滅多にない素質の高さ、世界に愛されていると言っても過言ではない。……過言かな？
魔力と賢さの偏りも気になる。魔術師は基本、魔力に比例して賢さが高いのだ。この偏りは一体何なのだろうか？
因みに、基本的に言うなら１．５０辺りが才能の無い人の限界だ。まあ、限界を超えれないことも無いけれど。
２．００辺りまでが天才の領域。３．００までなら化け物。それ以上はチート。存在がバグっている。つまり上限は３．００と考えていい。
僕が見た限りで３．００を超えたスキルを持つ人物は、いち、にー、さん……七人だな。割といた。いや、あいつらは例外例外。
というか装備の『愚者のアルカナ』ってなんだ？　アルカナ、タロット？　それなら何でセットじゃなくて一枚だけ？　『装備』に表示された以上、戦闘に関連する道具の筈だけど。
愚者とアルカナといえば大アルカナのタロットカードしかないが、もしかして

固有魔術(オリジナル)か？　そうだとしたら面白い。どんな効果なのだろう。

愚者、正位置なら『自由』『純粋』『天才』。逆位置では『軽率』『落ちこぼれ』『意気消沈』など。先生の性格からすると……『自由』は当てはまるが、実力はむしろ『落ちこぼれ』の方が近いな。別に本人の全てを表すとは言わないが、それでも固有魔術なら多少は傾向が本人の性質に寄るだろう。まあ、どんな代物かは分からないけど。

そうと決まったわけでもないし、これは一旦おいておこう。

『悪感』というのも良い。少なくともこれが必要な経験があるからこそ此処まで鍛えられているのだろう。その上、『信条』なんて見たことのないスキルまである。

後は、異常に高い経験値だな。この世界に『世界の毒』もとい、『魔素』は無いようだが、それに代わる物の存在は確認している。だから世界が違うからと言って経験値が溜まらないというわけではないのだが……だからと言って溜まりやすいわけでもない。

この経験値からすると、かなりの修羅場をくぐってきたんじゃないか？普通の人の持ち得る量じゃない。すぐにレベル１０まで上げられるぞ。

しかも、クラスが『脱落者』。クラスとは自己認識だから、本人は自分の事を『脱落者』だと認識しているわけだ。果たして何から脱落しているのやら。

ああ、忘れちゃいけない虚量石(ホローツ)もある。かなり貴重なもんなのに、何故平然と持ち歩けるのだろうか？

やっぱりこの人、おもしろいなぁ。

「あ、よくよく考えればグレン先生送り込んだのセリカ先生しかいないじゃん」

今更気付いた。

純白の手袋

それから、グレン先生の授業は悪化の一途だった。

僕の言葉を気にしていないのか、それとも忘れたのか。

或いは、そうする必要があるのか。むしろ意図してやっているのかと思うぐらい、彼の授業は不真面目に過ぎた。

最初は無意味ながらも板書をし、教科書も読み上げてた。しかし段々と板書をしなくなり、教科書のページを張り付けるようになり、終いには教科書を黒板に釘で打ち付けた。弁償が怖くないのだろうか。

錬金術の授業ではフラスコをコップ代わりになんか飲んでいた。一口貰ってみるとコーヒーの味がした。轢きたてだろうか、鼻腔から擽る芳醇な香りが、コーヒーというものの奥深さとその品性を教えてくれる。うん、完敗だ。先生の腕は中々のものだった。ただ、どう見ても葡萄ジュースにしか見えないのが不思議でならなかった。錬金術の産物らしい。へー。

そんな授業を繰り返し、指摘されても改めない。当然の如く、生真面目で教員に高い水準を求めるシスティーナはこれに耐えかねた。堪忍袋の緒が切れたのだ。予想外

だったのは、彼女が割と我慢が利く性格だったことだ。予想ではもう数日は早くブチぎれていただろう。

が、此処まで我慢したシスティーナの怒りは、過去に類を見ないほど激しく発現する。

システィーナが我慢の限界だとばかりに、椅子を倒す勢いで立ち上がる。

「いい加減にして下さい！」

「ん？だから、お望み通りにいい加減にやってんだろ？」

ぬけぬけと、そして堂々とそう言うグレン先生。口には釘を加え、手には金槌。ここが教室内でなければ、日曜大工でもしているかと見間違う格好だ。というか今どうやってしゃべったのだろうか。そっちの方が気になる。

「子供みたいな屁理屈を捏ねないで下さい！」

思うに、システィーナがここまで激昂するのは先生の飄々とした態度も要因の一つではないだろうか。もう少し外面だけでも真面目をよそっていれば……いや、同じか。

「まあそうカッカすんなよ、白髪増えるぞ？」

「誰が怒らせていると思っているんですか！」

「ほら、そんなに怒りっぽいからこんな年でもう白髪だらけじゃないか……可哀そうに」

「これは白髪じゃなくて銀髪です！本当に憐れむように私を見ないで！」

うん、グレン先生は天性の煽り性なんだろう。いや、揶揄うと楽しいからこんな態度をとっている可能性もあるが。その証拠に、他の生徒とシスティーナに対する態度は全く違う。と言っても第一印象のせいかもしれないな。

でも揶揄い甲斐がある相手、とシスティーナを認識しているのだとしたら、それはそれで面白い。つまり揶揄いすぎて怒らせても対処できる、或いは相手の怒り具合をコントロールできる自信があるという事なのだから。

まあ、考えすぎという可能性もあるが、主人公ならどっちもあり得る可能性だ。

「ああ、もうこういう手は使いたくないんですけど、先生が今後も態度を改めないのであれば、こちらにも考えがありますからね!?」

「ほう、どんなだ?」

「私は、学園にそれなりの影響力を持つ魔術の名門フィーベル家の娘です。私がお父様に進言すれば、あなたの進退を決するのは容易いことです。実際、それに足る態度をとってきたわけですし」

こほん、咳払いをしてクールダウンをしたシスティーナが相手になるべく危機感を覚えさせるように、ゆっくり話していた。

「え……マジで?」

驚いた顔のグレン先生を見て、主導権を取れたと思ったシスティーナはここが正念場

だとばかりに勢いづく。

「マジです！本当はこんな手段に訴えたくはありません！ですが、貴方がこれ以上授業に対する姿勢を改めないと言うならば――――――」

「お父様に、期待していますとよろしくお伝えください！」

「なっ！」

勢いづいたシスティーナに急ブレーキをかけるようなグレン先生の返し。その顔には紳士的な、これまで見たことが無い程優しい笑みと、救いを見出した求道者のような一心の期待が込められた真摯なまなざしがあった。

その返しと、何故ここまで嬉しそうなのかが理解できないシスティーナは、此処であっけにとられる。先ほどまで勢いついていた反動もあるだろう。まるで酸欠になった金魚の様に、その薔薇色の唇をパクパクさせていた。

「いやー、よかったよかった！これで一か月待たずに辞められる！白髪のお嬢さん、俺の為に本当にありがとう！」

「貴方っていう人は――――――！」

理解が追いついたのだろうか。頬は朱に染まり、それどころか耳、いや顔全体までその赤は広がっていく。怒りによって促進された血行は、外から見ても一目瞭然な怒り具合をその顔に表していた。

その大きすぎる怒りゆえだろうか、システィーナは左手に嵌められた手袋を脱ぎ、グレンに叩きつけた。

手首のスナップの利いた、良い投擲。その手袋はグレン先生の顔に勢いよく当たり、良い音を鳴らす。

「痛ぇ！」

より心臓に近い左手。それは魔術魔術を効率よく使用するのに適した手であり、その手を覆う手袋を相手に投げつけるという行為は「魔術による決闘」意思表示である。

「貴方にそれが受けられますか？」

しんと静まり返る教室。先ほどまでの静寂とは違う、事の成り行きを伺う静寂。見まわさずとも教室中の視線がこの二人に注目していることが分かった。

「お前……マジか？」

「私は本気です」

柄になく真剣に聞いたグレンに、切り捨てるように返す。その言葉から引き返す意思など無いことが分かり、これが冗談の類でないと周知される。

「シ、システィー・ダメ！早くグレン先生に謝って！手袋拾って！」

親友のルミアが慌てて駆け寄って諌める。

「……お前、何が望みだ？」

こんなたいそれたことをした以上、システィーナ本人にも冗談の気が無いのは確か。問題は先生に何を願うかだが……まさか辞職じゃないだろう。こんなことをせずとも辞職させる方法があるのだから。家の力だけれど。

「今までの態度を改め、ちゃんと為になる授業を行うこと。これが私の求めることです」

まあ、当然の要求だな。辞任を求めても反省しないなら、次は態度の改善を要求するのは必然。そもそもうちのクラスはヒューイ先生が辞めてかなり授業が遅れているから、此処でグレン先生が辞めると更に他のクラスに置いて行かれることとなる。

「辞表を書け、じゃあないのか」

グレン先生は意外そうに問いかけた。

それもそうだ。さっきまで息を荒くして頭に血を登らせていた少女が、こんなにも早く冷静になったのだから。

熱し易く冷め易い？ＮＯだ。システィーナの怒りはまだ収まっていない。それは彼女の表皮から洩れる体温や心臓の鼓動、何よりその雰囲気でわかる。

では何故ある程度冷静になっているのか。それは偏に「意地」であろう。

「魔術の名門、フィーベル家が一人娘、システィーナ・フィーベル」で在らんとする意地。それは高いプライドとして自らに弛みを許さず、また他にも怠慢を許さない。常に

その肩書に相応しくあろうと精進する、システィーナの行動原理の一つである。
要はどこぞの優雅と同じである。なんとこちらには「うっかり」が無いが。
「もし、貴方が講師をやめたいのであれば、そんな要求に意味はありません」
「あっそ、そりゃあ残念だ。だが、お前が俺に要求する以上、俺もお前に何かを要求して良いってことは忘れてねーよな？」
「当然です。なんでもどうぞ？」
余裕すら持ってそういうシスティーナの口角は軽く吊り上がっていた。いっそ妖艶ともいえるを浮かべて、グレン先生を煽る。その言葉からは、暗に「自信がないなら降りてもいいのだぞ？」という問いかけを感じさせる。
何をもってして余裕を感じているのかは分からない。或いはただのはったり、強がりの類で、実際は心の中で冷や汗だらだら垂らしてるのかもしれないが、その表情から不安を見取ることはできない。まあ脈拍が未だに早いし、軽く背中も湿気ってるのが分かる僕に強がりは聞かないが。
何を要求されるか分からない決闘を、どのくらいの実力かも分からない相手に挑む。それは幼稚な楽観故が見て取れる。いわば「蛮勇」。
しかし蛮勇無くして進歩はあるのだろうか？道を切り開く者たちは、いつだって根拠の無い自信をもって進んでいった。この「蛮勇」こそ、システィーナの「フィーベル家

の娘」として在ろうとする心意気なのだ。誰がそれを笑えようか。
実際、教員たちが自らより遥かに強いと知る学生たちも、システィーナの事を笑おうとはしなかった。
その実力があると思ったものもいるだろう。或いは心の中に馬鹿にした気持ちを押し込んだものもいるかもしれない。
しかし、確かに彼女は教室の全員に「こいつなら勝つかもしれない」と思わせた。だからこそ視線が集中しているのだ。
こいつなら。そう思わせる信頼。普段の説教ばかりで、マイナス面の印象しか持たれていないだろうシスティーナが公に嫌われていないのは、この信頼の基となる高潔な立ち振る舞いが原因なのだろう。
「お前、馬鹿だろう。嫁入り前の娘が、そうも簡単に「何でもします」なんて言うんじゃねぇ。親御さんが泣くぞ」
苦虫を噛み潰したような顔でそういうグレン先生。一応、大人としての良識はあるみたいだ。根っからの屑ではないってことだね。
「それでも、私はフィーベル家の娘として魔術を貶める貴方を放っておくことはできません！」
「あ、熱い。熱過ぎるよ、お前。いっそあせくさ……いやなんでもない」

「今何て言おうとしたんですか？」

先生の失言にニッコリ食いつくシスティーナ。笑っている筈なのにこれほどプレッシャーを掛けれるのは凄いと思うんだ。なんせ、みているこっちも肝が冷えるんだから。

「やーれやれ、こんな黴の生えた古臭い儀礼を吹っかけてくる、骨董品のような魔術師がいるとはな。……いいぜ、その決闘――――――」

ニヤリと笑ったグレン先生は、投げつけられた白手袋を宙に放り、こう決めた。

「――――――受けてやろう」

そして眼前に落ちてきた手袋を横に薙いだてで掴――――――め無かった。

パサリ、落ちた手袋が聞こえもしない音を鳴らすのを、その場の全員が聞いた気がした。

冷ややかな目で見つめられた先生は、気まずそうに手袋を拾い直す。

更に付け加えると、決闘自体はまだ主流である。ただあまり見られないだけで、別に時代に置いて行かれた古い習慣とかそういうのではない。魔術師同士の喧嘩の時に重宝されているのだ。

「ただし、お前のようなガキに怪我させんのは気が引ける。使用可能な魔術は【ショッ

ク・ボルト】のみ。それ以外の手段は全面禁止とする。いいな？」

「構いません。決闘のルールは受理した側に優先権がありますので」

使用可能な魔術の種類は一種類か。

どれほど改変できるか、或いは相手の視線から着弾ルートを見極めて避けれるか。そこが決め手だろう。

少なくとも僕ならそうする。【ショック・ボルト】の改変程度ならいくらでもできるし、システィーナは生真面目ゆえにそんなことをしようなどと考えたことすらない。改変した【ショック・ボルト】を使えばシスティーナの混乱を誘えるだろうし、何より今現在の授業内容の無意味さを教えられるかもしれない。ルール自体は一見してポピュラーな『早打ち』勝負に見えるが、此処まで深い意図があるならば……やはり主人公として相応しい注意深さだ。

此処まで考えれば、今までのシスティーナに対する態度もこの時までの布石のように思える。

そうか、たった一か月の非常勤講師。短時間で生徒の心を掴むには、多少時間がかかっても、初めに強い印象を与えなければならないのだろう。

「で、だ。俺が勝った場合の要求だが……そうだな」

頭の天辺から爪先まで、エロ親父のような視線で嘗め回すように見たグレン先生は、

システィーナに顔を近づけてワイルドな笑みでこう言った。
「よく見たらお前、かなり上玉だな。よし、俺が勝ったらお前には俺の女になってもらう」
「――――――っ！」
周囲はそのあまりにも屑過ぎる要求に騒めく。
「わ、分かりました。受けて立ちます」
「システィ……」
傍で、ハラハラしながら成り行きを見守っていたルミアが、心配そうにそう言った。
システィーナの顔も軽く引きつる。まさか本当に下種な要求をされるとは思ってなかったのだろうか？しかしその覚悟はあるはずだ。それこそシスティーナ・フィーベルなのだから。
「……だはは！冗談だよ、冗談！そんな泣きそうな顔すんなって！」
「だっ、誰が泣きそうだと――――――」
「お前だけど？」
「……っ！」
「安心しろ、ガキに興味はねーよ。俺からの要求は唯一つ。俺に対する説教の禁止だ」

「ば、馬鹿にしてっ！」
グレン先生の発言が冗談だと知り、システィーナは羞恥に顔を赤らめる。
抑えきれない羞恥を誤魔化すように怒りに転換し、グレン先生に食って掛かる。
「ほら、さっさと行くぞ」
それを軽くいなし、中庭へ向かう。その背中は楽しげで、まるで追いかけっこをする悪戯っ子のよう。
「あっ、待ちなさいよ！もう、貴方だけは絶対に許さないんだから！」
その後を追うシスティーナの長い白髪が、その足取りで左右に揺れる。
その姿はまるで、飼い主に構って貰えて嬉しそうにする猫だと感じたのは、きっとグレン先生が彼女につけた『白猫』という渾名からだろうか。

後で聞くところ、そんな見え方をしたのは僕だけだったようだ。